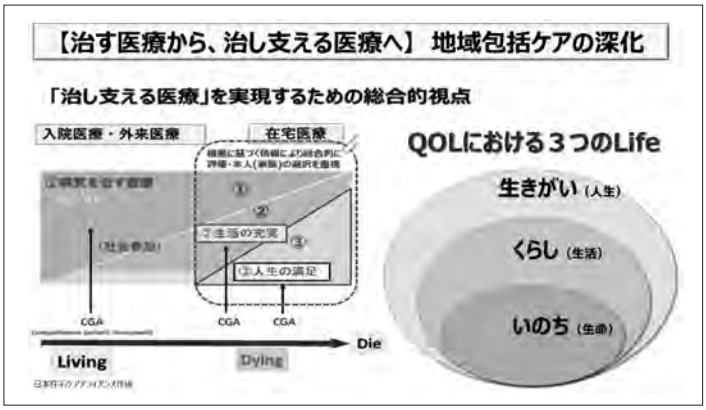
安心ある在宅療養を目指した多職種が活用できる「3つのLifeに着目した日本版QOL（Quality of Life）」の指標開発および地域実装

飯島 勝矢 ●東京大学 未来ビジョン研究センター・高齢社会総合研究機構 教授・機構長

飯島勝矢



要旨

在宅医療介護連携において、質の担保された安心な在宅ケアが求められる。患者および家族介護者のQOL（Quality of Life）を重視することは言うまでもないが、患者中心と言われながらも、多職種間での考え方の不一致や、本人・家族のご意向の認識に大きなギャップが生じてしまうケースも少なくない。そこで、安心な在宅療養を目指した、多職種が活用できる「3つのLifeに着目した日本版QOLの簡易指標」を開発するため、①インタビュー、②テキストマイニング、③デルファイ法を駆使して構築した。完成した簡易指標（10項目：暫定版）を在宅療養に携わる全ての専門職が活用し、普段からお互いに意識し、チームの中で常に確認し合うツールになることを期待している。

地域医療貢献のポイント

多職種連携の中で、多職種間での考え方の不一致や本人・家族のご意向の認識に大きなギャップは少なくない。今回の簡易指標である共通軸をお互いに意識し合い、患者や家族介護者の望んでいる方向性を確認し合うこと。

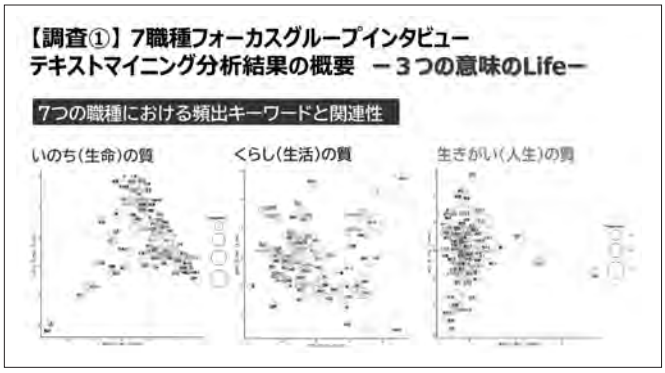
1.目的と方法

超高齢社会に向けて、健康長寿を目指すと同時に、「住み続けてきた地域や自宅で安心していつまでも住み続けたい」という、いわゆるAging in Placeを目標とすべく、地域包括ケアシステムの中の在宅医療介護連携がより重要となる。質の担保された、より良い在宅ケアを継続していくために、患者およびそのご家族も含めた介護者の生活の質（Quality of Life：以下、QOL）を重視することは言うまでもない。しかし、患者中心と言われながらも、多職種連携を進める中で、その職種間での考え方の不一致や本人・家族のご意向の認識に大きなギャップが生じてしまっているケースも決して少なくない。

そこで、申請者が所属する日本在宅ケアアライアンス（JHHCA：22団体加盟）では、日本に暮らす高齢者におけるQOLにおけるLifeを「①生命・いのち（生理的健康）」、「②生活・日々の暮らし」、「③人生・生きがい」という3つの意味で解釈し、在宅ケアのさらなる底上げを図るべく、JHHCA内・学術委員会の研究班を組み、以下の研究開発（3つのLifeの意味を包む包括的な日本版QOL簡

図1

図2



易指標開発）を進めてきた。

【手法】在宅療養に関わる多職種（医療介護：7分野の職種、合計22名）に対して、立体的にQOLを具体的にどう捉えているか自記式アンケート、それを踏まえたフォーカスグループインタビューを実施した。さらに、在宅療養者（患者本人と家族：計6事例）も対象とし、インタビューを実施した。

2.現状の成果・考察

そのインタビュー結果を質的研究として実践していくに当たり、以下のステップを踏んで進めた（図1・2参照）。

(1)Text Mining法により、各専門職や患者・ご家族からのインタビュー内容における頻出キーワードを炙り出す。

(2)さらに、その重要キーワードをインタビュー内容の実際の文字起こし（コメント集）にも立ち戻り、どのような趣旨や背景で主張していたのか、Grounded Text Mining法により質的に研究し、しっかりとアイテムプールを作成し、カテゴリー別に類型化する。

(3)前述の2つのステップにより、完成した39個のアイテムプールに対して、インタビュー対象者であった専門職（7分野）に再びデルファイ法にて、スコアリング及び合議プロセスを経て、10項目の簡易指標（最終形の暫定版）を完成させた。

3.今後の展望

暫定版の最終形の簡易指標は以下の通りである。（図3・4参照）これを在宅療養に携わる全ての専門職が普段から意識し、チームの中で常に確認し合うツールになることを期待している。

この暫定版を活用し、今後、数多くのモデルフィールドにおいてパイロット実装検証を行い、最終決定版を完成させる予定である。

図3

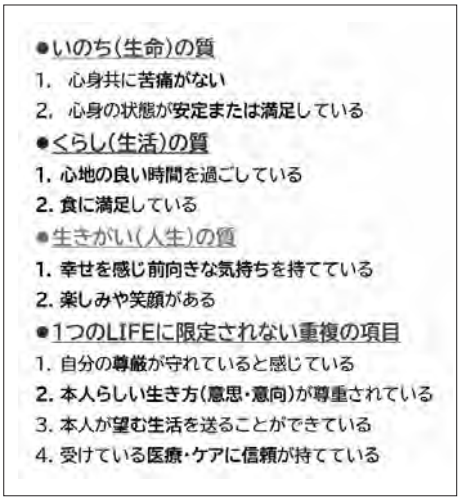
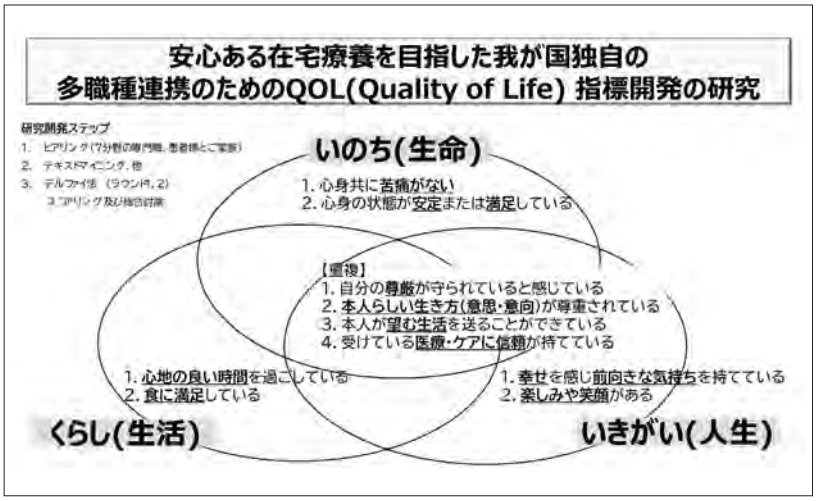



図4